2024年度入学試験問題

国　語

注　意

一　問題冊子は一冊（十七ページ）、解答用紙は二枚です。
二　試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等により解答できない場合は、手を高く挙げて監督者に知らせなさい。
三　すべての解答用紙に、それぞれ二箇所受験番号を算用数字で記入しなさい。
四　解答は、すべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
五　試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

問題　一

次の文章は、主に奈良時代の宝物を収めた正倉院とその宝物の保存・管理・展示（正倉院展）などについて述べたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。（出題の都合上、本文に手を加えたところがある。）

一般的に特別展の観覧者数は人気を計るためのバロメーターであり、収益に直結するため、開催館にとっては大きな関心事である。しかしながら、観覧者の増加に伴う会場の混雑は好ましからざる事態であるため、開催館はその緩和を図るべく、さまざまな取り組みを行っている。たとえば、入館前の行列を解消するために、整理券を配布することがある。しかし、整理券に記された指定時間前にも行列が発生するほか、館内の目玉となる展示物前の行列は防ぎようがない。また、整理券の違法販売行為の事例も漏れ聞く。

令和三年（二〇二一）春に東京国立博物館で開催された「国宝鳥獣戯画のすべて」展では、展示ケース前にはじめて「動く歩道」が設置された。観覧者の滞留をコントロールする画期的な試みといえる。しかし、会場内全体の人の流れをコントロールしなければ、そこに至るまでに人が溢（あふ）れることに変わりはない。何よりも、「文化芸術立国」を掲げるわが国の博物館において、「誘導」という名の下で美術鑑賞にかける時間や見方を「 A 」要」することについては、今後、論議を呼ぶだろう。

また、混雑が予想される特別展では、正倉院展と同様、人混みの後ろからでも見えるような配慮から、高い位置に展示品を並べている。その結果、子供を含めて、ア**セタケ**の低い人にとっては展示物が見にくくなってしまっている。

高齢者や障碍（しょうがい）者を含む「観覧弱者」に配慮する場合、すべて日時指定制とするほかに混雑を解消する術（すべ）はない。しかし、それでは観覧者の総数が減って収益も減少し、それを避けるために観覧料金の高額化に繋（つな）がってしまう。

すでにコロナ禍の前から、注1インバウンド客をターゲットとして観覧料金を高額化する構想はあった。だがそれは平均所得が高く、文化に支出する金額も高い欧米の消費事情を、日本にそのまま適用する危ういものである。確かに、「飛行機のファーストクラス」ほどまで高額でなくとも、「新幹線のグリーン席」程度の特別料金でゆったりと鑑賞できるならば、それを望む声も需

要もあるだろう。

それでも、「エコノミー席」や「自由席」を一定数は確保しなければ経済的な弱者の排除に繋がってしまう。それは公益性をまったく無視したもので、ひいては文化の享受に格差を生むこととなる。

正倉院展は戦争で疲弊した国民を励ますことを目的に、皇室文化の至宝である正倉院宝物の展観が望まれたことが端緒となり、今日まで開催されている。平成十三年（二〇〇一）に博物館が独立行政法人化してからも公益性に鑑（かんが）み、正倉院宝物は無償で貸与され、主催は奈良国立博物館のみとし、民間企業が協力するという形での開催を維持してきた。

時代はめぐり、すでに第二次世界大戦による疲弊は癒え、観覧者と宝物の双方にストレスの生じている現状を鑑みた場合、正倉院展の開催のあり方について見なおす時期が到来したと感じていた。その矢先、コロナとの闘いのなかで、世界中で多くの人が軽重問わず、芸術や文化を渇望し、正倉院展の開催についても、それを待ち望む多くの声が寄せられた。実はかつて正倉院展の開催については、その公共性の高さから、報道各社が挙（こぞ）って、奈良の秋の風物詩という採り上げ方をしていたが、近年は一般的な特別展と同じく、協力・協賛社以外がその開催を採り上げることはほぼなくなっていた。それが、コロナ禍における正倉院展については、その開催を喜ぶ人々の声をマスコミ各社が伝えることとなった。いずれにしても、①いまだ正倉院展の意義は形骸化しておらず、今回のパンデミックのなかにおいても、その役割を再認識するに至った。

正倉院の構内に公開施設がなく、奈良国立博物館が同じ国の機関であったことなどから、同館において正倉院展が開催されてきた。しかし、行政改革の一環として、博物館が独立行政法人となり、すでに四半世紀近くが経過した。この先、利益優先の貸し館方式、あるいは運営を民間に委託するコンセッション方式に移行する可能性も否めない。

また、コロナ後は企業メセナ[注二]といった社会貢献目的で行う芸術文化支援についても成立しづらい状況となり、正倉院展についても収益事業と化す不安は拭いきれない。これまでのように、即時的な販売促進や宣伝効果を求めないという企業側の姿勢も変わり、加えて博物館も独立採算制に完全移行するに至り、正倉院展に公益性を担保できない状況が来ないとはいい切れない。

一般的な特別展のあり方を否定するつもりはなく、部外者が口を挟むものではない。しかし、少なくとも正倉院展については、

大がかりな広報を通じて集客し、収益を図る、いわゆるブロックバスター的な展覧会でありつづける必要はないという主張については聴されよう。

正倉院宝物の公開には公益性を担保する必要があるため、②「プレミア化」するようなことがあってはならない。さまざまな要望や条件を勘案すると、収蔵庫に展示施設を併設し、常設展示することこそが、その最もふさわしいあり方といえる。宝物の展示数は多くなくとも、静かに鑑賞でき、低料金で、奈良に来ればいつでも観られるようになることが、宝物にとっても、観覧者にとっても、最良のイ**サク**である。

常設の公開施設をつくる構想は昭和二十五年（一九五〇）の日本学術会議[注三]の提言のうち、唯一果たせていない事柄である。新憲法下において、この提言によって、正倉院がめざすべき方向性が示され、今日おおむね達成することができた。提言が正しかったことは何よりも宝物の現状が良好であることが物語っている。

それならば、正倉院展を開催している奈良国立博物館で宝物の常設展示をすればよいという意見もあるかもしれない。しかし、奈良国立博物館は奈良を中心とした神仏に関する美術を専門に展示するためのものであり、決して正倉院展のためだけにあるわけではない。

勅封[注四]管理との兼ね合いをどうするかという課題は残るが、実現はまったく不可能なことではない。たとえば、勅封のかかる収蔵スペースをガラス張りにするなどの工夫をすれば、金属や石などで作られたウ**ヒカク**的堅牢な宝物であれば、常時公開も対応可能になり、安全性を確保しながら公開の幅を拡充することもできる。

正倉院宝物と同じく古文化財を保存し、さらに公開もしている東京国立博物館の法隆寺献納宝物館のような専用の収蔵展示施設はそのモデルとなる。法隆寺献納宝物館は正倉院宝物よりも古い法隆寺の寺宝類を良好な保存環境を保ったまま展示している。おおむね常設ながら、脆弱な木漆工品はそのゾーンの公開期間を限定するなど、運用上の工夫がなされている。

このような展示施設が実現すれば、現行の正倉院展のように、宝物をダイジェストで紹介する、いわば「正倉院の宝物」展とは趣きの異なる、正倉院に関わる本質的なことを理解できるような展示、つまり本当の意味での「正倉院」展が可能となる。

正倉院宝物とほぼ同時代に描かれた「飛鳥美人」で知られる国宝高松塚古墳壁画が黴（かび）の被害を受けたことは記憶に新しい。その後、文化庁は石室を解体し、環境の整備された修理作業室に運んで修理している。現在は予後を見守りつつ、横たわる石室の各壁面を、さながら無菌室の新生児を覗（のぞ）くように、ガラス越しに見学するようになっている。

かろうじて救われた、いにしえの美人画を見るために、多少の不自由さを厭（いと）うことなく、わずかな公開期間のなか、見学日時を予約してでも訪れる人は絶えない。正倉院宝物も含め、このような脆弱な古文化財の公開のあり方については、いずれ国民的なコンセンサス[注五]が得られるものと信じてやまない。

（西川明彦『正倉院のしごと　宝物を守り伝える舞台裏』による）

注一　インバウンド客＝ここでは海外から国内（日本）へ訪れる外国人旅行者のこと。

注二　企業メセナ＝経済的に成り立ちにくい文化・芸術活動に対する企業の支援のこと。

注三　日本学術会議＝日本における科学者の代表機関であり、内閣府の所管である。科学に関する重要事項の審議および政府への答申・勧告などの活動を行っている。

注四　勅封＝古代以来、天皇の権威に基づいて正倉の扉の開閉は厳格に管理されており、これを勅封という。なお、現在は勅封の開閉はあくまでも国が管理しており、天皇は決定事項の確認を行っている。

注五　コンセンサス＝合意のこと。

問一　傍線部**アイウ**のカタカナ部分を漢字に直しなさい。

問二　空欄**A**について、本文の趣旨に適した漢字一字を書きなさい。

問三　傍線部①について、過去と現在における「正倉院展の意義」とはどのようなものであると筆者は考えているのか、本文に即して説明しなさい。

問四　傍線部②「プレミア化」について、具体的にはどのようなことを指しているのか、本文に即して説明しなさい。

問五　今後の正倉院展の開催のあり方について、いかなる理念のもとにどのような施設と展示内容を企画すべきであると筆者は主張しているのか、本文全体の内容をふまえて説明しなさい。

焉④喪レ之ヲ豈ニ独リノミナラン竹乎。（蘇軾『東坡集』による）

注一　蜩腹蛇蚹＝蝉の腹、蛇が脱皮したあとの皮に見られる横紋。ここではタケノコを形容したもの。

注二　剣抜＝抜きはなった剣のように鋭くまっすぐな様子。

注三　十尋＝約十八メートル。ここでは竹が極めて高く成長すること。

注四　急起＝すぐにはじめること。

注五　直遂＝ひたすらにまっすぐ進むこと。

注六　兎起鶻落＝ウサギが跳ねたり、ハヤブサが急降下したりすること。ここでは動作の速いこと。

注七　不学之過＝練習が不充分なことによる失敗。

注八　見＝ここでは理解すること。

注九　平居＝ふだん。

注十　了然＝はっきりとわかっているつもり。

注十一　忽焉＝たちまち。

問一　傍線部①を現代語訳しなさい。

問二　傍線部②は、具体的には何がどのようになることか、簡潔に述べなさい。

問三　傍線部③をすべて平仮名で書き下しなさい。

問四　傍線部④について、筆者は何を言おうとしているのか、この段落の内容をふまえて簡潔に述べなさい。

問題　四

次の文章は、蘇軾（一〇三六～一一〇一）が友人の文与可（一〇一八～一〇七九）から竹の絵の描き方を教わり、その経験をもとに考えを述べたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。（設問の都合上、訓点を省略した所がある。）

竹之始生、一寸之萌耳。而節葉具焉。自蜩腹蛇蚹注一以至于剣注二拔十尋者、生而有之也。今画者乃節節而為之、葉葉而累之。豈復有竹乎。①故画竹必先得成竹於胸中。執筆熟視、乃見其所欲画者。注四急起従之、振筆直遂、以追其所見、如兎注六起鶻落。②少縦則逝矣。

与可之教予。③如此。予不能然也。而心識其所以然。夫既心識其所以然而不能然者、内外不一、心手不相応、不注七学之過也。故凡有見注八於中而操之不熟者、注九平居自視了然、而臨事忽注十一

（次のページにも問題があります）

問題　二

次の文章は、仕事を通じて親しくなった「聖」と「わたし」の関係を「わたし」の視点から描いたものである。（出題の都合上、【一】【二】【三】の三つの部分に区切っているが、話は続いている。）これを読んで、後の問に答えなさい。

【一】

石川聖は、恭子さんが紹介してくれた大手出版社の社員で、その巨大な会社の校閲局[注一]に所属していた。

彼女自身も校閲の仕事をしているけれど、フリーランス[注二]の校閲者や外部のプロダクションなどの窓口もしていて、ゲラ[注三]や原稿やデータの受け渡しの多くは彼女が担当していた。

仕事のやりとりは、メールと電話と宅配便があれば、それでほとんど間にあってしまうのだけれど、聖と一緒に仕事をするようになって冬をひとつ越えて数ヵ月が過ぎる頃には、ちょっとした用事でも、それからとくに用事がなくても、仕事の進み具合はどうなのなんて言って彼女はちょくちょく電話をかけてくるようになった。

【二】

わたしがはじめて聖に会ったのは、恭子さんに頼まれてアルバイトを始めた最初のころ、社員校閲者やほかのフリーランスの校閲者を交えてお互いの紹介や挨拶もかねて開かれた新年会でのことだった。わたしは恭子さんから転送されてきた案内を眺め、三日以上も悩んで、出席することにしたのだった。

聖の髪は耳がすこしみえるくらいの短さで、きれいな茶色に染められていた。そしてとてもきちんと化粧をしていた。雑誌やポスターやテレビなどではなく、こんなにはっきりしたつくりの顔をこんなに近くでじっさいにみるのははじめてのことだった。何か特殊なふちどりでもなされているかのように聖のまわりには独特の雰囲気がたちこめていて、ほかの場所にくらべてそこだけが数段明るく照らされているようにみえるほどだった。

注二　前駆＝馬に乗って先導すること。また、その者。

注三　衛府＝宮中を護衛し、行幸の供奉（ぐぶ）をつかさどる役所の総称。また、そこに所属する武官。

注四　胡籙＝矢を入れて携える武具。

注五　やうれ＝目下の者に呼びかけるときにいう語。やあ。やい。おい。

注六　無期＝久しいこと。

注七　といふ定＝「とはいうものの」の意。

注八　縫物＝縫い取り。刺繍（しゅう）。

注九　賀茂祭＝京都の上賀茂神社と下鴨神社の祭り。

注十　進奉不参＝伺候しないこと。

問一　傍線部**アイウエ**を現代語訳しなさい。

問二　破線部①について、源行遠の行動の理由を本文に即してわかりやすく説明しなさい。

問三　破線部②について、源行遠が不審に思ったのはなぜか、本文に即してわかりやすく説明しなさい。

問四　白河法皇が源行遠の謹慎処分を解いた理由を本文に即してわかりやすく説明しなさい。

聖は誰にたいしてもはっきりとものを言う性格でもあるらしくて、その会の終わりごろ、ちょっとしたことがきっかけで同席していた男性編集者と口論になったのだけれども、彼女は最後には相手を完全に黙らせてしまった。ふたつ隣の席ですべてのやりとりを目撃していたわたしは、聖の口から効果的にくりだされる挑発的な言葉や言い切るような力強さや言いまわし、それから相手がむきになって口調が激しくなってくると、ときどきまわりにちらっと目をやって笑ってみせる仕草などにわけのわからない興奮を感じたのを覚えている。頭の回転がはやくて、その場の雰囲気をさっと見極め、ときには気の利いた冗談を言って相手を笑わせたりもできる、わたしには想像もつかないような能力をいくつも持った女性だということを知るには——そんな能力にまったく縁のないわたしでさえ、その数時間があればじゅうぶんだった。

聖とわたしはおなじ年で、町はとても離れていたけれどおなじ長野県の出身だった。そのふたつと性別をのぞけばわたしたちのあいだに共通点と呼べそうなものはひとつもみあたらなかったのに、どういうわけか聖はわたしにとても親切にしてくれた。

新年会からすこししてから具体的にアルバイトのやりとりを始め、何度かゲラの受け渡しと確認のために会わなければならなかったとき、わたしはいつもとても緊張していたけれど、聖はそんなこちらの緊張をまるで最初から存在しないみたいにしてふるまってくれるので、わたしの肩からはちょっとずつちからが抜けてゆき、すこしずつ、仕事以外の話をするようになっていった。わたしはほとんど聖の話をただきいているだけだったけれど、聖はわたしのことを面白い人だと言ってほんとうに面白そうに笑ってみせるのだった。ときどき、どこが面白いの、ときいてみても、どこって、ぜんぶ面白いじゃない、と言ってまたうれしそうに笑うだけで、まともにとりあってはくれなかった。そのたびになんと答えてよいのかわからず、わたしは黙ってうつむいていた。すると聖はわたしにむかって、いいのよ、それってべつにわたしにしかわからない面白さだから、わたしが楽しんでるだけなんだから、あなたがわからなくても落ちこむことはないわよ、と言ってまたにっこりと笑うのだった。聖にくらべてわたしはそんなにたくさんはしゃべれなかったけれど、ときには時間を忘れてそんなひとときを楽しんでいることに気がつくこともあって、そんな自分にしずかに驚いていたのだった。

問題　三

次の文章は、白河法皇が北面の武士たちに任国へ下るまねをさせて御覧になった際の出来事である。これを読んで、後の問に答えなさい。

これも今は昔、白河法皇、ア鳥羽殿におはしましける時、注一北面の者どもに、受領の国へ下るまねせさせて、御覧あるべしとて、玄蕃頭久孝といふ者をなして、衣冠に衣出して、その外の五位どもをば前駆せさせ、注二注三衛府どもをば、注四胡籙負ひにして御覧あるべしとて、おのおの錦、唐綾を着て、劣らじとしけるに、左衛門尉源行遠、心殊に出で立ちて、「人にかねて見えなば、めなれぬべし」とて、①御前近かりける人の家に入り居て、従者を呼びて、「注五やうれ、御前の辺にて見て来」と、見て参らせてけり。注六無期に見えざりければ、イ「いかにかうは遅きにか」と、辰の時とこそ催しはありしか、さがるといふ注七定、午未の時には、渡らんずらんものをと思ひて、待ち居たるに、門の方に声して、ウ「あはれ、ゆゆしかりつるものかなゆゆしかりつるものかな」といへども、エただ参るものをいふらんと思ふ程に、「玄蕃殿の国司姿こそ、をかしかりつれ」といふ。「藤左衛門殿は錦を着給ひつ。源兵衛殿注八は縫物をして、金の文をつけて」など語る。②怪しう覚えて、「やうれ」と呼べば、この「見て来」とてやりつる男、笑みて出で来て、「大方かばかりの見物候はず。注九賀茂祭も物にても候はず。院の御桟敷の方へ、渡しあひ給ひたりつるさまは、目も及び候はず」といふ。「さていかに」といへば、「早う果て候ひぬ」といふ。「こはいかに、来ては告げぬぞ」といへば、「こはいかなる事にか候ふらん。『参りて見て来』と仰せ候へば、目もたたかず、よく見て候ふぞかし」といふ。大方とかくいふばかりなし。さる程に、「行遠は注十進奉不参、返す返す奇怪なり。たしかに召し籠めよ」と仰せ下されて、廿日余り候ひける程に、この次第を聞こし召して、笑はせおはしましてぞ、召し籠めは許りてけるとか。

（『宇治拾遺物語』による）

注一　北面の者＝北面の武士。院の御所を警護する武士。

【三】

そんなふうに仕事で顔をあわせるようになって一年が過ぎたころ、ある打ちあわせのあとで、会社はどうなの、と聖がきいてきた。

仕事じたいはとてもやりがいがあるし、自分にもとてもあっているとは思うけれど、じつは居心地はそんなによくはないのだということをわたしは遠まわしに話してみた。要領をえないようなわたしの話が終わると、聖はわたしの目をじっとみて、そうなの、と短く答え、それからしばらくふたりとも黙っていた。聖は何かを考えているみたいな表情をして黙ったまま何も話さないので、もしかしたらさっきの話を愚痴というふうに受けとられたのではないかと心配になった。聖は純粋に仕事の話を――たとえば今とりかかっているゲラのことや段取りなんかについてきいていたのに、わたしがそれとは関係のない、つまり聖にとってはどうでもいいような職場の雰囲気の愚痴めいた話をしてしまったせいで、もしかしたら聖を呆れさせたか、それとも気分を害してしまったのかもしれないと思ってわたしは急に不安になった。けれど、どうすればそういうつもりで話したのではないということを伝えられるのかわたしにはわからなかった。うまく話せる自信がなく、余計なことを言ってしまった、どうすればいいのかと黙りこんでいると、だったらフリーランスでやるのもありかもしれないよね、という聖の声がした。

①――え、とわたしは顔をあげて、聖の顔をみた。聖は目のわきをきれいな色のついた爪のさきで何度か小さく搔きながら話をつづけた。

「フリーランスっていっても、お給料とか保険とか、今がどういう感じなのかわたしにはわからないから無責任なことは言えないんだけれど、あなたくらいきちんと仕事をしてる人だったら月に四本フルで仕事を受けて――そうだね、月に三十万はいけると思うな。もちろんむらはあるだろうけれど、――そうね、それくらいはいけると思う」と聖はわたしの目をじっとみつめて言うのだった。

「それ以上は、頑張りしだいっていうところだと思う」

聖の気分を損なったわけではなかったことを知って、わたしはため息をつきたいくらいに安心したけれど、フリーランスとかれたすきという自分の気持ちを、わたしは信頼しているところがあるの。だから、すきとか愛とか――まあ愛というもののことについてはあまり考えたことがないけれど、最終的に残るのはそんなふうにいつか変質したり単純に消滅したりしてしまうようなものじゃなくて、やはり信頼なのよ」

そう言うと、聖はわたしをじっとみつめた。

「それで、わたしはあなたを信頼しているの」

「わたしを？」わたしは驚いて言った。

（川上未映子『すべて真夜中の恋人たち』による）

注一　校閲局＝原稿・印刷物などの不備や誤りを調べ正す部署。

注二　フリーランス＝自由契約。

注三　ゲラ＝校正刷り。

注四　デイトレード＝一日のうちに売買を終えて利益を得る株式取引。

問一　【二】の部分で「わたし」がとらえた「聖」の印象を本文に即してまとめなさい。

問二　傍線部①のように「わたし」が反応したのはなぜか、説明しなさい。

問三　傍線部②「都合のよさ」とは具体的にはどういうことか、説明しなさい。

問四　傍線部③のように「わたし」が笑うことができたのはなぜか、説明しなさい。

問五　傍線部④の「信用」と「信頼」のちがいを「聖」はどのようにとらえているか、説明しなさい。

月に三十万とか、むらとか、ほかには、あなたくらいきちんと仕事をしていれば、というようなわたしにたいする聖の評価の言葉とか――思いがけず聖の口からでてきたそんな言葉のいくつかに混乱して、わたしはまた黙りこんでしまった。

「どうかな、あなたどう思う？」

のぞきこむようにしてたずねる聖に何度か肯いてみせ、頭のなかでさっき聖が話したことの内容をくりかえしてみた。フリーの校閲者。聖はわたしに、フリーランスで校閲者をやってみるという考えかたがあると言ってくれたのだった。いまアルバイトで受けもっている仕事をメインにして、そしてフリーになって、会社を辞める。そうすればわたしはもう会社に行かずにすみ、今の仕事を自分のペースとやりかたでつづけることができるかもしれないという、そういう話を聖はしたのだった。

これからは家で、フリーの校閲者として生活をする。わたしは何度も頭のなかで声にして、そう言ってみた。すると、会社を辞めるなんてことも、それからもちろん自分ひとりで今の仕事をするなんてこれまでただの一度も考えたことがなかったはずなのに、ひとたびこうして言葉にされてしまったのをもう一度頭のなかでつぶやいてみると、どういうわけか、それはだんだんひどく現実的な重さと響きをもちはじめて、そもそもわたしにはそれ以外の選択がなかったんじゃないかというふうにさえ感じられて、自分のその都合のよさに頬の赤らむ思いがするのだった。

わたしは会社のことを思った。あの雰囲気のことを思いだしてみた。毎日どこか行く場所があるということの安心のほかに、いったいあの場所にどんな大切なことがあるのだろうとそんなことをあらためて考えてみた。いつも右手の棚にみえている薄手の段ボールでできたお菓子の箱。誰かのマグカップ。ほとんど灰色になったホワイトボード。パソコンの画面。きりきりと音をたてて痛みだすこめかみの感触。誰とも言葉を交わさない、しずかだけれど、でもどこまでもつづくまるで暗い夢のような時間。同僚たちの目のかたち。キーボードを叩く音。そんないくつかの映像のあいまに、わたしに読まれることを待っている、まだ印刷されたばかりの文字がびっしりとつまった真っ白いゲラがあらわれて、すこしだけ温かみのようなものを与えてくれるのだけれど、瞬きをするとその白く発光する手触りはすぐに見慣れた沈黙の奥へ消えていくのだった。

わたしの年収は三百二十万だった。

わたしは黙ったまま聖の言葉に肯いた。

「そういうものなの。それでね、わたしが信頼するのは、すきとか恋愛とか、愛とか――そういうところから出発するようなものじゃなくて、まずその人の仕事にたいする姿勢であるってことなの」

「仕事の姿勢？」わたしはききかえした。

「そう。姿勢。仕事にたいする姿勢よ。そこにはね、その人のぜんぶがあらわれるんだって、そんなふうにわたしは思ってるところがあるのよ」

「それは、真面目さとか、……そういうの？」とわたしはきいてみた。

「そうね」と聖はちょっと考えるようにしてすこしのあいだ天井のほうをみつめてから、何度か肯いた。「平たく言えば、そういうことかも知れない。仕事ってね、それが家事でも、スーパーのレジ打ちでも、たとえばデイトレード[注四]でも肉体労働でもなんでもいいの。種類でもなければ、結果を出すとか出さないとか、そういうものでもないの。結果なんて運もあるし、そんなものいくらでも変わるもの。他人なんていくらだって言いくるめることはできるし、ごまかすことだってできるしね。でも、自分にだけは嘘はつけないもの。自分の人生において仕事というものをどんなふうにとらえていて、それにたいしてどれだけ敬意を払って、そして努力しているか。あるいは、したか。わたしが信頼するのはそんなふうに自分の仕事とむきあっている人なのよ。――こう言っちゃうとなんだかまるきり時代錯誤の馬鹿みたいなんだけど、わたしはそう思ってるところがあるのよ」

「それは」わたしは何度か肯いて言った。

「そういうのは、どこでわかるの」

「そんなの、ちょっと付きあって、話して、仕事をみれば一発でわかるわよ」と聖はにっこり笑って言った。

「わかるの」

「わかるわよ」と聖は唇のはしっこを両方にくっとあげて、当然というような顔でわたしをみた。

「そして、わたしはそういう人のことだけをすきになるの」聖はにっこりと笑って話をつづけた。「そして、そういう人に向けら

会社にいれば、ただ割り当てられた仕事をこなしていくだけでお給料をもらえるのはありがたかったけれど、でも聖がさっき言ったように――もしも、もしも定期的に校閲の仕事をもらうことができれば、フリーランスで生活していくというのは可能性のまったくないことではないような、いよいよそんな気がしてくるのだった。アルバイトを始めて一年がたとうとしていたけれど、わたしに回ってくるゲラの数も収入もとても安定していたし、誰もいない家でひとりきりでゲラに向きあい、そのひとつひとつの言葉と文章をゆっくりと洗いなおすことは、まるでおなじ内容の仕事とはいっても会社でするのとはまったく違う充実感で満ちていた。

「そんなことができたら、すごく、いいよね」とわたしは独りごとみたいに言って小さく笑った。笑うつもりはなかったのだけれど、どんな顔をしてよいのかとっさに判断がつかなくて、なんだかふだんから何も考えずにぼうっと生きていることを告げているような笑いかたになってしまった。わたしの胸は暗く波うち、おしぼりで何度も指さきをぬぐった。

「じっさい、フリーの校閲者はすごく多いけどね」聖は明るい声で言った。

「二十年以上、それでやってる人もいるし」

「二十年」とわたしは言った。

「そうよ。二十年」聖はにっこり笑った。

「……でも、毎月、仕事がある、……なんていうのかな、その、保証みたいなのって、もちろんないと思うし」

こんなことを聖にきくとどう思われるのかとさらに不安な気持ちになったけれど、わたしは思いきって言ってみた。すると聖はわたしの心配をよそに真剣な顔をしてこちらをじっと凝視し、もちろんそこはすごく大事なところよ、と言って力強く肯いてみせた。

「当然だけどうちの会社は本をつくらない月なんてないし、もちろん今わたしがすべての約束なんてできないけれど、局長もあなたの仕事をほんとうに高く評価してるし、もっと受けてもらえると助かるのにって、よく話しているのよ。ほんとうよ、これ。だから、あなたがもしもフリーになって、やってもらえるゲラが増えるんだとしたら、こちらとしてもほんとうにありがたい話

であるのは事実なのよ」と聖は言った。

「そうなの」わたしはすこし驚いて、聖の顔をみた。

「そうよ」と聖はわたしの不安を押しのけるように、すこしおおきな声で言った。

そうなの、とわたしはもう一度言ってからため息をひとつついてしまうと、顔が自然にゆるんで③今度はふつうに笑うことができた。

「わたしはね、信頼できる仕事をする人がすきなの」しばらくして、聖が言った。

「信頼？」

「そう。信頼」そう言うと聖はうれしそうな顔をして笑った。

「それはね、信用っていうのとはまたちょっと違っていて――なんていうのかな、読んで字のごとく、まあ、頼れるところがある、ってことなんだけど」

わたしは肯いた。

「信用っていうのは、信用貸しとかいう言葉もあるくらいでさ、この人とは利害が一致するなと思ったら――つまり、人って一方的に信用したりしなかったりすることができるじゃない。だからそこには相手がいない感じがするのよね。つまりいったん信用したとしても、何かのちょっとした加減で、そんなのいつでも信用できなくなることもできるっていうか」

「うん」

「その意味では、信用なんてたいしたことじゃないのよ。ちょっとした都合や風向きで簡単になかったことにできるものなのよ。でもね、信頼っていうのはわたしにとってそうじゃないのよ。④信用と信頼は、ちがうの。信頼したぶん、わたしも相手に、何かをちゃんと手渡しているって、そういうふうに感じるの」

聖はそう言いながら耳のうしろを掻いた。

「そして、ひとたびその相手を信頼したら、その信頼は消えることはないのよ」